



2025.10

漢方医学センター
センター長・教授
及川 哲郎

風邪の漢方治療 1

漢方は元々、風邪やインフルエンザなどを含む急性発熱性疾患の治療を中心に発展してきた歴史があります。また古典落語に「葛根湯医者」が登場していることから、風邪薬である葛根湯が長く庶民に親しまれてきたことが分かります。そこで今回は風邪の漢方治療についてお話ししましょう。

風邪の漢方治療の基本的考え方に、患者さんの「病期」や「体力」に応じた治療を行うというものがあります。漢方医学のできた時代にはウイルスや細菌といった病原体の概念がなく、ただ外から何か（これを邪とか邪気と呼んでいました）が体の中に入りこんで発熱など風邪の症状を起こすと考えられていました。そして邪が体に入り込むと、まず体の表面に発熱、頭痛、咽頭痛といった風邪の初期症状が出ると考えたのです。体の表面に邪がいる時期を太陽病期といい、この「病期」には体温をあげ発汗させて熱を下げ、発汗させると同時に体の表面に取りついている邪を体外に追い払おうとしました。そのために用いられる漢方薬が、よく知られている葛根湯なのです。

葛根湯についてももう少し詳しく説明すると、葛根湯は単一の生薬ではなく、桂皮、芍薬、甘草、大棗、生姜、麻黄、葛根という7種類もの生薬の組み合わせから出来ています。それぞれの生薬には役割があり、桂皮・芍薬にはかぜの初期に徐々に発汗させる作用、甘草には胃腸を守り炎症を抑える作用、大棗・生姜には胃腸の保護、麻黄には発汗作用の増強、そして葛根には頭痛や肩こりを改善する抗炎症や筋弛緩作用があります。従ってこれらを足し合わせると、葛根湯はかぜの引き始めて悪寒や熱があり、自然発汗はなく頭痛や肩の張りといったつらい症状がある場合に使うとよく効くということになります。

例えば30歳台男性の患者さんが午前中から熱っぽく、昼から悪寒とともに39度台に発熱し頭痛もあるため来院しました。自然発汗はなく葛根湯エキスを服用したところ、30分ほどで発汗がはじまりほどなく解熱、体もだいぶ楽になりました。葛根湯は「病期」が適切ならすぐに効果が現れることも少なくありません。葛根湯は風邪の引き初めに飲むとよいとご存知の方もいらっしゃると思いますが、それには生薬の配合に裏付けられたちゃんとした理由があるのです。葛根湯の個性と言っても良いでしょう。

もう一点の「体力」ですが、体力のあるなしが適切な漢方薬を選択する上で重要であることはこのコラムでも時々触れてきたと思います。葛根湯はとてもよく効きますが、体力のない患者さんに使うと発汗させ過ぎて体力を奪い、治療がうまく行かないばかりか具合がかえって悪化することがあります。そのようなときには体力のない患者さん向けにマイルドに発汗させる桂枝湯など別の漢方薬を用いることになります。

次回のコラムでは、こうした漢方薬の風邪薬のラインナップも紹介したいと思います。